新編水滸畫傳

三編

七

へ21
875
27

遠門 875 27

新編水滸画傳巻之弍拾七

東武　高井蘭山翁　譯編

○都監張藝方武松と施恩が宿怨を諧し一ヶ月餘りも立て居る処に炎暑漸却て説武松施恩が宿怨を諧

退さむ為源をせじ。やや秋ふかりぬ。或日施恩武松と彼が居の内ふ坐し。宋江を待て居る処に門番に表人の下女一疋のるを牽せ施恩乃ち施恩が居ふ入て問るに。虎を殺されし武松ハ此所ふ在や。施恩出て。武松を見るに乃ち是孟州とちる。云る所監張藝方が家人なりしが。施恩に下女ふ向て云汝ふ武松と尋ひていると言わりや。彼下女ふ云ふ来る人は監相公の命を奉て此処に来りぬ。彼監相公老早より武松ハ高世の豪傑なることを聞及れて。乃ち是を武松と邀へ来る。礼書簡をも携へ

明治二十五年七月十日購求

へ21 875 27 特

来れりて。施恩ふ与へられば。施恩先て披見し。暗に表ひろ張教監ハこれ我が
親の上に生て。下和と云人と云。尚且武松ハ流人のなれば。張教監ゞ命ゝ背き
ゞ。唯宮〳〵武松と共ゝ逃ハんと思ひ。況武松に對して。彼両人の下友と指さゝ。
這人等ハ況張教監相公の使者なるゞ。相公教張ふ遇ひぬうんとのてふて。今日武
松見と迎のためなると幸せ。死て来れぬ。教張肯て行ぬべき。武松ハこれ一重
の士なれば。何の恩恵か別ふも及ばゞ。云るハ張教監相公人と弛て我と迎へらるハ。
是況好ゝ。我何ぞこれと辞するこめんや。ゆく〳〵弛行べしと。遂に裝束と
改免るふ。かの下友ホとらん。孟州の城下ふ弛。幸ちに張教監ゞ敏の来て
るゝ。遂ふ下友ら跡ふて廳前ふ。彼張家方武松ゞ来りしを
見て大ふ驚び乃ち相見る而ふ。武松ハ廳下ふ於て拜と後。偖ゞ廳の後に
ふ〳〵張教監先武松ふ對して云るハ我等汝ゞ主の豪傑まして人と

助け。死生と同じうすると。我今汝と共て張家ふ来ひ〳〵思ふ。汝肯て我幕下
ふ居せんや。武松跪て慇懃ふ謝して云来ハ是罪と犯しゝる流人之。況相公の吹
挙と蒙ゞ来敢て大るの労と奪ひべし。張教監これと聞て大に怒び。仮ち左右に
命じて。酒食と備けしめ。自ら盃と執て。武松と勧めれば。武松ゞこれと感謝。
一連に数盃の酒と飲て。遂に廳前と退れり。武時一人の下友武松と引て。一ツの
房間の内ふ入て云るハ教師宮〳〵此に休息し。明日対面せんと。
別て房間の外に出れば。武松ゞ夜ハ遂に歇ぬ翌日又人と施恩が方に来て。
行李と取表ゞより武松ハ張教監ゞ家ふ立て事へり。張教監ゞ武松と後
堂ふ呼入て酒食と与へ抑且内外出入と伴して恰も親族のごく款待ゞ衣
被ふと恵ゞ。深く恐懼とされるゞ。武松暗に是と欺んで。心中に思ひるハ。
教監相公かくのごく我と愛ゞ。深ふ感激の至りなれば。我又況不忘てよう

此來於監の所とす歩も離さてるく左右ふ侍ひ。絃むべ妓酒林ふ注て施恩ふ
まゝ云ん帳もなく。自ら多く徐遠に於るこれいうを近日帳を求めて施恩を訪
ちんと呼りり。扨世上の人武松が出所するとを聞及び。何等の云事ある附を遠
来て武松を新ゝなるに武松も又新と稱其。張都監が所に出て宜しく処成を
云ごに。張都監も扨て武松が言に従て云事を吸引しる由。世の人拳て武
松に金銀紬帛を送りれ。武松を先を下名も敬さて扨て褒の内ふへ走りり。
光陰矢のごくふしてたゝ八月の中秋ふ成りしを。張都監後堂の鑒春樓の
下ふ酒宴を設け中秋を賞し。乃ち武松をも宴上ふ呼で座に招しめられば。
武松大に悦んで。後堂の辺に来り。宴上を窺見るに。張都監が夫人を始と
て女中多く宴に招て坐しる由。武松壮ハしく身を回して走り出んとせし
処に。張都監来て武松を呼で云。汝何事を走り出んとする。武松答て云相公の

武松再遭災厄

夫人ますびを女中多く宴に就て居ぬ武松に親しく酌を避んと欲すると張青監大ひに咲て云汝大ひに差へり我汝が義あると敬ふて汝と共に席に昇るべし故自ら避んとすや汝は是我が公腹の若者れいおしも遠慮なく共に宴に就て酒を酌べきに忍ず辞すること勿れ武松が云来は是罪を犯せし流人身に豈わへて相公の夫人と共に対しゆさんや彼くい来を繞して出去る張青監云汝いんを再三態勤のことをうのや今青は汝小作人もめ〳〵されど汝座に引て酒を飲ゝ何の妨うわ〳〵んぞ〳〵我が心小背くことなれ武松再三再に辞れを強て監牢くこれを繞ゝ自ら引て坐せしめば武松これを辞すること能ゝ遂に吾礼の罪を謝して遁ん未だ小坐しふりう張青監は手髪小金ゝ酒を斟しめ再三勧めて汎已に数遍巡りしは張青監又青を添ゝめく再ひれ勧め宋侯良久しして後張青監武松小對していく大丈夫の酒どもに

何で小盞を用んや。宮〻く大盞を用ひて吱〻く酌じて自〻大盞を執て歩
に武松に強れば武松一連に数盞酌乾る迄に月光光彩直ち東窓を
照し来れば武松盞興に乗じ〻く只顧盞を傾け〻ば薛婆は又六分酔ひ
乃ち張都監又寵愛の侍女小玉蘭を云呼出して云ふ汝今夜は別に
外人もなく唯独我が伝膳の武松のみ然に生て妨げなれば汝速に一曲を
唱ふて我が少しめよ玉蘭命を承まりて敢て辞せず乃ち象版を執て換
来坂の中秋水調の歌を唱ていはく

明月幾時有把酒問青天不知天上宮闕今夕是何
年我欲乗風飯去只恐瓊樓玉宇高處不勝寒起舞
弄清影何似在人間高捲珠簾低綺戸照無眠不應
有恨何事常向別時圓人有悲歡離合月有陰晴圓
缺此事古難全但願人長久萬里共嬋娟

玉蘭已に唱ひ畢りて傍に坐しなれば独り都監又云玉蘭汝冥〻く盃を把て
勧むべし玉蘭命を奉り乃ち盃を執て了環小鬟を指せこれを張都監小
姐に次に同じく一盃の酒を篩で夫人に勧め第三の盃を武松に勧めなれば
武松既に低〻く盃を接忙しく張都監夫婦小礼を述て遂に酒を飲
乾て再び玉盃を又玉蘭小姐に返しぬ此時張都監玉蘭を指ざして武松小
姐に対して云なへ此女彫る聰明伶俐小姐に若者律を知り附更針指の技
て云なへ張り彼を嫁いまんば近日の内に吉日を擇んで汝に嫁せしめん武松
この言を聞て急に起そして云なへ系何等の若なれば殺てかくいとこと申
やさんや彫くは相公なれと僥しなへ張都監打咲て云我已に此言を出さいうへい
忍ず汝小嫁せしめん者汝これを辞まるとなれ我又変して約を背くことを再

び盃を執てれ勧め。汎又八九遍めぐりしゝば武松こゝに於て碎すでに発邑くハ
礼を失ふゝもめんやとて。遂に弦勾監夫婦を物謝して。房を退き。於て房間の
茶に煮てつゝと寝き。尚自おもへらく。汎食腹ふ汎て。何とやゝん睡りがたれば宜しく枕
を倚みて歌むべしとて。忽ち枕を捻ねてつ茶ふ踏り出。良久しく枕を演るして。
夫を見る時方に三更の左側なりしゝば。をもや枕を休ゝ一睡まどゝして。遂に房
間ふ入て衣服を脱んとせ。然に後堂の辺に人聲あて。絨来れりと呼ること再三
なり。武松是を聞て起ひ見。勾監相公限なく我を憐ゝみひて。竜宝の美女
玉蘂をすゝ我ふ賜るべしとのことなるに。今後堂ふ絨来るとゝ呼ゝ我いんで弛て
絨を捕へゝんやとて。持引提て走ちに後堂の内ふ跳入る知に。彼玉蘂慌
く走り出て。武松ふ對して云ゝ一人の絨後園の内ふ入るにまぎれを捉へ更。
武松まゝ呼も早らゝ走ちに後園の内ふ証入て。男を搜しゝれども。更に人影も

めゝざしゝ武松又身を翻して奔り出んとせ。然に。夜久暗冥にして茶汎とん
ぐらゝ。一つの凳のあるに跌ひて忽ち倒れるに左右より十四五人の下女跑来り。
一齊ふ声を放つて。絨こゝにあるとゝ大ふ呼り。遂に武松を捉へ絆めるに氏村武松
急に呼つて云ゝるハ我い是武松なり汎ち張て我を絨こゝ云や。法の下女ら武松
ぐゝ云を耳ふも呼入ゝ。都て武松を引て後堂の茶に来りるに。燈燭熒煌ゝ
男を照ゝぬ時張勾監ハ廳上に跳出大ひに呼つて云ゝるハ。絨ゝ絨ゝ
と云ゝれハ弦の下友ども武松を推て廳茶ふ。武松呼つて云我ハ是絨ふ
めゝ是武松ゝ代ゝ張て素を捉へり。相公迷ゝふ我を免し更張監武
松を見て大ふ怒り。忽ち面及を変て罵りるハ汝武松絨配軍。我汝を接待て
人ふ徹んと欲毎ゝ愛憐を蒙れ。厚く湯を恵ゝるに。何の恩を忘て絨を
しゝるや。已に今宵も汝を信て汎宴に抗しゝ。我竜宝の玉蘂を汝に託

せんと約せしに平氏汝を搦て皮鞭をも捜んと思ふに張監汝絨を盗肝を
汝に擅に偷とかんと丹るハ是何の乃ぜぞや汝今又毛氏も分説あべしこれ
松がいとく糸豈わて絨を盗んや糸全く絨を捜んとて後園の内ふ地へ入る処に
何ぞ驚くん正中に驚めくんと八月傾て暗く驚ふ跌さ倒れるれど此一時に
不て遂に糸を絆う糸不肖うとの人生多て絨をあしらるとす那くに相会ぬ
うに察しめ下皮らぶ須を使しめふとあるん張監蓋いきまれて云汝いんでよく
これを抵牛んや我今汝が房間の内を捜さしめんとて別下皮らふ命じていく汝ふ
速に今武松を引て彼が房間の内を捜しめべ今青の絨ハ果
して武松ふ忍すべ下皮ふ別ち命を奉り彼て武松を擁て房間の内ふ入れ
榧を見出とこれを宝さ見るに上ふ衣裳あて下ハ敷て金盤銀盃等約莫一二
百表の旅物あり武松是を見て大ふ驚る紀只呆れて立ち淫ふ下皮彼

榧を擁て廳前に出しに張監これを見て大に武松を罵て云汝絨配軍かく
のごとく不忠不義を図絨を貪るや旅物既に露る上ハ汝如ぞ抵抗をん彼
ふも人の親を以て相すべ云て果して武云虚しうべ汝が貌ハ豪傑
なる云べ人ふ忍て我源く汝を使じ腹心と思ひ事を任ぜ
心絨骨絨肝あるを。既ふ今汝が榧の内ふ旅物を捜し求る上ハ。今青の
盗絨いとく汝を云を。是を以て明白。我尚明日詳ふこれを正すべしとて繫
下皮ふ命じて獄ふ武松を機密房用部屋の内ふ入れ一人武松吾実の罪に
陥されるを紙然。忠公猜を悩し思ひ煩居る張監ハ手紙ふ遠人を明程
ふ弛て府尹に紙絡を送り形を弘ぬ又押司孔目以下の役人ふ多も金銀を
送り翌日早く下皮ふ命じ武松を州裡に引せる紀に府尹まさに廳上に
出るべ得捕鈐察ふ武松を擁て廳前ふ立り又彼旅物を榧と共に廳下

小撥出さしむ。時かの張都監が使者僕役等ぐく張都監が文書を以て。府尹小官し
られ。府尹これを被賢し。忽ち左右に命じ。武松を召て小人を縛めて。松い
牢寺獄の下職を呼集り。武松を入牢さるべきよし命下る。則武松を
に云を聚て。分説せしめん家及親戚しるべ。府尹を云を怒り。忽ち大に怒と云。
彼絨武松は是遠流の死罪なれば。仁義の者ふめ。いかんぞ絨をおさらんや。
古語に小人は恒の産なれば。恒の心あり。と云。彼今死罪に立て。盤纏を
つひ尽せり。忽ち恒の心を発ふて。絨を求ん。既に絨物家なれば上へ絨
情明白。必ずしも彼が詐の言を受て。是写く彼を拷官せよ。と。已に
右に命じ。これば下皮を棒檢ろそ。武松を拷官せんと。盤纏ざる。武松は辞を
見て。心中に思ひ。我仮令幾ばくの労苦もとも。必定我ひを容ぬ。と
思て。我絨を求ざると白状し。且武場の拷問を脱れんば。他日又死を免れんと

暗に思案を定め。乃ち呼つて云。汝は亦へて実情を白状せ。且棒を打ひ。
るれとも。遂に白状しる。尚月十五日の夜張都監の宴上に於て。洋多の金盞
銀盃あるを見て。忽ち是を偸んと欲ふ。忽ち。乃ち夜の深るに。遂に思ひ入て
偸ん。此外に一点も偽る所なし。彼くの拷官を免し。府尹が云。汝材を見て
を絨しめる。是列ち小人の所為。且汝を入牢させんと。則牢寺に命じ。頭枷
とり。即時に死罪人の牢中に。武松は日ふ牢獄の内に立て。暗に
思ひ。張都監我にいかる怨あて。這等の陥穽を設けて。我を陥しる。
我り一命を脱れ出牢。もとめ。再び事を正さんとて。牙を咬噛を切て
腹りぬ。扨牢子ハ下の下職と商議して。武松が手足に枷を入。獄吏騒く
ちつて。片時も忘ること。彼恩ハ武松が已に入牢しるを聞及び
大きに驚き。慌て性を城下に来て。父老管家と商議しる。老管家を云。

這回張叔夜蔣門神が為ふ仇を報ぜんと欲し。別張教監と共に作の計を設けて武松を陷しめ張教監は又彼府尹に下法役人ふ絡絡を送りる故府尹を始として役人ふ武松が冤況を密に呂顧武松を殺害せんとの計るを。張は我又是を熟〳〵思ふに武松を救ふん計ハ唯独り牢院の押牢義級が新方によく武松が一命を脱れしめて何方ふも逃し遣他日又別ふ商議して此恨を雪ぐべし。施恩が云尚牢の義級姓ハ康名て素と可なりんや。老管家が云武松が獄ふ自ら義級が家に新て宜しく新たに遭るハ素是汝が幸に因てなれば汝今彼を救ハずんば。さらにひつきの時と為すべきを宮〳〵に弛て義級を新たひんとも絡き計を用ひて武松が災禍を救ふべし。施恩父の命を受大ひに悦び乃ち二百兩の銀を以て密に康義級が宿所に到りる処に。康義級ハ牢中の役所に立て未だ回らざる間なれば。施恩乃義級が家人を牢中に送り新と告られば。康義級新て家に回り遂に施恩と相見座已に定り。施恩先忙〳〵武松が事を一〳〵伴ふ。康義級これを聞て云るハ。這回武松が為て張教練が為せ一不ハ張教練と張教監と日姓なる義を結びて兄弟の盟を誓ひるが。頃日かの蔣門神を已が家に躯し。遂ぬ抑且蔣門神が為ふ仇を報ぜんと雪て計を張教監ふ求め。遂に武松を害の罪ふ陥し。又多くの絡絡を伝役人に送り弥武松を害せんと欲に事ふ成ること役人ふも新て皆彼が術絡を受ぬ故に府尹相公も武松を死罪ふ新ふんと。唯独り葉孔目ハ人となり。元廉直ふして事を糾さんと欲ぜ。況や一毫も金銀を貪ることを已に這回も張教監が術絡を受ぬ武松に武松が一命を保つて恵ま。今日来是ふの新を信し上ハ我自ら武松を憐み厚く彼に事ふの苦を勉ることあり。ければ。

新編水滸畫傳卷之十九

足下ハ早く縁ある人を求めて。葉孔目の力を藉るべし。武松が命ハ必定恙あるまじ
施恩氏ことゞ呼て大ゐに喜び。即ち彼二百両の銀の内一百両を丸出して。康節級ゐ送
られぬ。康節級再ビ辞して還しかれた。施恩又再ビ酒を設して送る。乃ち康節級
遂に辞することなくして收めぬ。施恩氏対賞程ゐ用ひ又葉孔目と親しき人を
尋ね求め一百両の銀を葉孔目ゐ送て。武松が埒写るべき決巧のことを乞ハれ。葉
孔目も素より武松が志の豪傑なるを知れバ。ねんごろに助けく思ふ時節あれかしよ
く武松を憐んで。再ビ府尹ゐ告げ。武松が械枷のこと含く分明なるべし。縱ひ金盛
ゐの把を係元ゐ与ふ。ひんぞく死罪に行んや。ひとしく公に攻巧して。府尹ハ為て
張都監より絶結を請しゐ。忽ちに武松を害せんと欲もれた。葉孔目ゐ固く辞り
の為絶を受れて。妄りに殺すと雖ども。牢中ゐて武松を害すべしと。暗に諫て
牢しゐ。牢ゐ。康節級又施恩が教を受一百両の銀を与ふ。武松を懇に恨を

ふ。も解放ゐ。乃ち武松を府尹が毒害ゐ脱れて。一命を恙なく保ちぬ
武松ハ系ゐ三十回ゐて摽目ゐ施恩三入孔囚牢とあ。て大ゐ侍文と齟齬を
支配ゐて編者の粗忽ゐ。呂洞氏の譯ゐ通俗忠義水滸伝も誤るまゝ
改ゐ。今般摽目を更新に掲ゐ。これこれを述

○武松大ゐ飛雲浦を闹て
施恩ハ翌日多く酒食を具へ康節級を誘ひ。これを牢中ゐ送らんと欲ゐ。
康節級これを深し。遂に施恩を引て大牢の辺ゐ来り。時武松ハ康節級
が憐みを被りて子母の枷をも除れ。寛ぎ暗ゐこれを感悦せ。即ち施恩ハ
武松に對面して大ゐ悦び。乃酒食お牢の内ゐ携りて武松に食しめ。又の牢の
銀子を丸出して牢子以下のものに送て。武松がことを頼しゐ。皆ことゞ等
せり。施恩又武松が耳ゐ附て低言る。這次禍ひ明ゐ見張都監張團練

人のまなが將門神が爲に仇を報ぜんと欲し。長兄敬ハを計に陷し。かくのごさ
き實の義を交しめぬ。弱れた兄を見て憂慮ぬふとなん。我已に
一人の友を新こて葉孔目が方へ長兄のことを通達しる孔に葉孔目あざ
兄を救ふの心ありて。因て寫しく力を用ひ。出兄を助けんと爲り。已に今死罪
を改て。流罪ふ変ぜ出べきうえ。ハ在牢の日限滿ぬ長兄再び牢を出て。
配所に就きなべし。強ハ又別に商議をなして牢を全すべき方必ず然す
志を安んじ。日限の滿るを待ん。武松ハ代ごろ兄の枷を除し身軽實ざ
る為。寫しき役機を設ぬば。牢を脫て逃出んと思ひしかども。施恩が言を聞
代念を休ふ。施恩代日ハ牢ハの外に在て。終日武松を慰め。已に黄昏ふ
至て管中に帰り。翌日又酒食殘材を調へ。康節級と共に牢中に來り。乃ち
武松に遇て酒食を款待。又殘材をかち牢子以下の者ふ送つて酒殘と

ふさうめ。自も又茶ふ及び美味ふ帰り。又ハ緣の人を新んで。大ふの役人ふに
絶緒を送り。武松ハ身の上憂なく。ハに交所わるんとを求め。又ハ日を經て。
酒食をくびに支ふ套の衣服を調へ。再び康節級を新こられて牢中に送つて
武松ふ与へ。牢列に美く酒食をくびに肉果殺拍を牢子以下の者ふ送り歓
待ぬ。ひとり後は施恩毎日牢中に出入して武松を防ぎ孔に張團練が奴人
ふ兄を見て張團練ふ形と若ハれバ張團練ハ代を聞て大ふ驚き怪しく張
團練が被ふ逐つて伴ふ兄を伺ハれバ又多く金帛を府尹ふ送つてこのことを
若ハ。せ孔に府尹ハ東京絶緒を貪る絨友ハれ。まく金帛を受て大ふ怒
びられ。ハ代ハ下友を牢中に弛しめ。動静を伺ハしめ。一人の來ることハ立
孔にハれを捉へよと嚴しく命じられ。兄を奉り下友ハ毎日牢獄の辺に來て緊く
窺ひる。施恩再び牢中に來て武松を孔ふて絶に唯康節級ハに牢子

以下の人々と彩て武松を抱き立ちのき氏より施恩ハ毎度康爺級が家に立て武松が清恩を求め尚且多く金銀を用ひて武松が一命を免れしめんとせ必ずるに既うして最後五月ありて葉孔目再ビ再ビ府尹へつげて武松実ハ罪なく張都監ハ詐の計に隨しかも上張都監ハ蔣門神が莫大の賄賂とうけて非法のことを巧成しかるゆゑ細くと伺ひ聞せられて府尹も始て武松ハ一点の罪なきことを知り暗に表り張都監已に蔣門神が若干の賄賂をうけて武松を我が手に送て殺さんとするハ都て是我を欺くに似たり我向後此事を深んずべしとて此より府尹も武松を害せんとする計を休て牢中のことも制せざりしゑ施恩が父老管営葉孔目ハ酒食を牢中へ送て武松へ為に法役人の方へ賄賂を送りいろんとして武松を救ハんとせりるゆゑに最二ヶ月の日限已に満るんで府尹ハ武松を牢中より呼出して罪を変改し

乃ち葉孔目武松が為へ力を用ひて徐流罪に定め即日武松を二十杖を施して面に金印を刺黥して乃ち恩州へ配所と文書を人の下役に与へて武松を送りやれば人の下役ら命を奉ずる武松に頸枷を加即日武松を引て孟州へ離れ去り扨張都監ハ武松が死罪を免れて流罪に変改しかるとて心中甚だ怒ビ是一人の家僕を友府に到て繼和金盞銀盃を贈れり武松ハ先に二十杖を受時老管営葉孔目を頼で法役人へ賄賂を送りて武松を杖にて軽くして痛むことなかりしかるに武松ハ帰ク張都監へ怨ビ遂に人の下役に引れて孟州城を一里斗逃出ル扨ハ施恩ハ辺の酒店に立て因より走出武松を迎へられ武松ハ施恩を見るゆゑ歓及ぶる喜へ涙を包み帰を巻てありしゆゑ武松心中に形を恨を乃問て云るハ何故かくのごとき様子ぞと云るハ毎度老

管営の方より酒食を贈りもてなして消息あり。汝は郎て久〳〵音耗も無
なべさりしは是いかるとぞ。施恩答て云。某向に数度老兄を訪ひてより
の後府尹是を知り下友らを牢中に繋ぎて堅く人の出入を禁じて。
中〳〵某が身を縁て捉へんと謀りける西門慶某ひとり牢中に至て老兄を
訪ふて絶ぬ。呉康節級が方に語て老兄の消息を求るのみ。某未月以来
妓院林に聞り。店の内に坐して居る処に彼蔣門神又大勢を引来り。某店
の内に入て某を散〳〵に打倒し。再び店を棄ひ元若干の家財を奪く
彼に有れば。某是に因て身を悩し久〳〵庵に郎て迯う共。今日老兄死和
に聞さるゆへ〳〵四名両套の綿衣を老兄に送んが為に迯出らう。抑且
別れの盃をも勧んが為に知の酒店に入ひ誓く歌を唱へて。〳〵〳〵人の下友
と語て。酒店に邀へんとせし所に人の下友めへて入ずして勿来と励して云

るは。武松は是絨漢なるに我等り汝が酒食を食することを。他日いかる累う
我が身に及ん。唯よく老に能行べきに汝を揺るとなんして再三武松を
催促し来ざれば施恩に難を与て仏中に若し即一錠十兵の銀を与出し。人人
の下友に与へる所に人人知て大ひに怒り。我等何ぞ汝が銀を受んやとて武松を
催し酒を与へ。施恩今は力に及ばず呉康の酒を辞で武松に献じ。まづ
一の包袱蘊を武松に与へて私に云るは。此内に二三の綿衣と一包の銀子あり。老
兄宜〳〵遠中に於て是を使ひ給へ。我熟彼人の下友を見るに好人を懐
ざる者なれば孫次の間随分仏を用ひ給へ。武松が云我を為に此云を聞し
已に死を求める方。汝を只仏に安んじ。書生出〳〵長。我必ず再会の期を待て
此時施恩答て云て泪を洒ぎ。袖を濡して別れを扱武松は人人の下友に
引連て十里ばかり地る処に人人の下友彼二人の者に何由を

来るべきと思ひ。武松隠くふ見せずして。公中に来ひる人。
武士人の下女なれば我をいんとも思ふ。遊莫ちんどられを思れんやとて。又八九里
ばかり行ける。前面に二人の漢子刀を帯して徐居るが。女人の下女と一所に旅して共
に武松を監押して往かれば。武松探てこれをとるふ。女人の下女は顔かの漢子ふか
向ひ眼弄し。暗に知らせを為せば。武松を見て七八分猜して唯自ら
心中に数発。詐て見ぬ様ふして。又三に里ばかり独て。前面を見れば清く蕩々たる
一つの浦あり。檣の傍ふ一座の牌楼あり。上に一片の額を掲。三大字あり見れば。飛雲
浦とあり。武松見てもあるべき様なして問ふ。此辺の地名は何とかなるや。女人の
下女答て云ふ。汝も人と同じく眼明るかるべしといふを。牌楼の上の額を見ざるか。飛
飛雲浦と云三字を写せり。武松又浦の辺に立住て云ふ。我てふて浄手せんに。
暫く待ん人と来ると云も。暫くありて。一人の下女を呼び。武松大ひに怒て放て。

雷のごとく吼り。只一柳を飛しく。彼下女ぐふ腹を踢られば。彼下女大力に踢られて。
実倒ふ水中に落入り。彼二人の下女これを見て。急に逃んとせり。武松大ひふ怒り
引捉へ猛勢を振ひ。一ぺ頭枷ハ自ら綱と二つふ撈られ。武松見て死上下女と共ふ水
中に投入。尚勢ひふ乗ト。檣の下に赴き見れば。かの女人の漢子先一人ハ眼を眩
して地上に倒れ。武松探て趕来て。彼一人が後心を拳を碎るべき迄ふ。一声
阿と叫んで倒れ。武松即此男等ち一人の力を奪れ。遂ふ胸の上を一衝刺て
推伏又立面て彼倒れる漢子を殺んとせり。彼漢子慌て扒起て逃走らんと
ども。武松雷のごとく跑来り。急ふ引て揪て大ふ罵りて。汝ハ何奴ぞ。敢て
来て虎の髭を撫んとする。彼肯て汝が一命を饒さん。
撥ぐ。ぜんば彼三人の為を例として忽ち殺さべきぞ。這漢子大ひに怕れて云ふ。
我等女人ハ実ふ是蔣門神が武芸の弟子なり。今蔣門神強豪練と計を設

武松夜中入孟州城

素面人と叱咤して刎面人の下友と力を併せ豪傑と殺さんと斗りぬ。と
見るまゝ忽ちふめ〳〵ざれば豪傑明〳〵ふこれと禁じて一命を撓し更に武松が云
汝が師蔣門神は今われの所ふあるぬ。那漢子答て云ふ〳〵彼地を出し時は蔣門
神は張團練と共に張孔目が後堂の鴛鴦樓にめして酒を酌樂〳〵我が等
が消息を待て云。武松が云既に此のごとくんば。汝は撓ぐべし。遂ふ刎ふ刎
ら。武松は対渠〳〵夢〳〵る刀の中。手一擦を撫〳〵生と見を芽し。彼面人
の下友死せざるとも如ん〳〵と各胸の上を刺通し。再び樓の上に休息し
ぶ〳〵熟〳〵思ひ見るに此の人の名を殺し〳〵も彼張孔目張團練蔣門神
は三人を殺さずんばいんぞ雖我が度の怨を雪ぐ事ん〳〵と良久く躊躇して
在るが遂に意を変じ。再び孟州へと立ち引返り。張團練蔣門神面人の妻は
武松を害せんと欲し〳〵張孔目張團練は絶路を送つて計を設け。竟に武松を陥阱

不隕して皮府に送りとゞめ武松をひ葉孔目ひ助けまた武日流罪ひ変ぜ
て死刑に逝くよう嘆くれば。蔣門神等。浸く患めることを知り監押の下女
あ八ひ多く金銀と与へ武松を害せんことを云含め。又二人の男子をして下女と
共に力を保さあるべひに豈ちくんや。二人のちんを却て張雲浦ひ於て一人も殺
ず武松に殺されぬ。武松ハ孟州城ひ回り来れば。紅日已に落て彩く戸を閉
處く門を閉しる。武松ハ出ちに知監ひ後園の外ひ出て。武知を呼ひ。後
門の内ひ一軒の裏屋あり。武松門外ひ伏して内の動静を伺ひるに。門をち
たゝハ衙門の内に立ていまゞ待つ居る。人音文ひるを聞ば。武松心中ひ忖りるハ。
り門をたゝる人回りる。我必ず計を仕つ内に入んものと。頭を伸して
待居る処に。一人の漢子燈籠を提て出来り乃ち後つの方を着迴して表
ひの戸を開さ出ちに床の上に坐りて睡りる。武松門外に在て潼の殺を聞て

一更の濃なり。武松ハ元来酒つを推て寝せられバ彼漢子ハ武松を呼て曰ク
云々ハ門外ハ立て門を突んとすなハ。何奴なるぞや。我終ハ今睡らんとするに。汝
何ぞ来るや。其速ハ逃去ずんバ。我再び起て汝を捉ふべきぞ。武松ハ
笑て却て仏中に抜び。彼刀を抜て右の手に提げ。左の手を以て彼ハ推寄せ
んハ彼漢子大ハ怒り。晴に麻布を以て。短棒を捻れ。壁ちに立つ辺ハ来て。壮つ〳〵く
門を突き武松を捉へんとせし。武松猿臂を伸して。彼漢子が頸の骨を緊と
捉へしハ骨も砕る許に笑て。禁雑なる再三喊ぶんとせしも。第一ハ
大力に頸の骨を揪へられて声出ず。第二ハ武松が手に月星々刀を持るを見て
大ハ驚を消し。唯一聖命を四日と乞へ。涙を流て。又刀を出すを見て。武
松が云汝我が識強なるを。彼漢子武松が刀を呼て。初めて武松なるを知り。大ひハ
怕れ慄て云るハ。拙子我を饒し給へ。這回拙子実の雑に遭ひぬるを。武松に
恨ハ。我を手ハ引て来り。こたびハ只恕くハ我が命を害し給ふを。武
松が云汝ハ一実情を流ハ我肯て汝を赦さん。拙子監ハ今何れの所に在やん
詐を。我ハ告よ。彼漢子が云我を人ハ今日張教練蔣門神等と倶に酒日
酒を酌で楽れるが。尚酒楼に在て。疾歩を備し居ふ。武松が云汝ハ去ハ
作を。彼漢子が云。我豈敢て謊を云んや。拙子必ず疑ひ給ふ。武松が云
すでハ。くのごとくんバ汝を饒し。ことを。去て刀をあげて。刀を刎て屍を倩ハ拾ふ。
再び刀を鞘に收め。托ハ〳〵裏ハの内ハ入て。彼施恩が送り給ふ絹衣を取出し。
これを着し。晴に門の上に跳上て。墻を越て直ちに酒楼の下に至て。武ハを
窺ひ。三ハ人の美媛一処に立て再三招を含んで云るハ。彼女人の客。今日朝
飯後より酒を酌で。殘〳〵菓子水よと只顧我〳〵を労し給ふ。打回らぶ〳〵ハ。亦復
夜飯を。これハの乃理ぞと。再三低云。機り給ふ。武松刀を抜き手に提遂

に門を推開て走り入て彼女を見て云るやう。汝らハ定めて我誠知つらん。
某一刻ハ不ても喊ぶとあらハ我今汝らを殺すべしと云も羅漢ごとき一人
の女已に声を放つて喊び。武松大ひに怒てこれを只一刀に斬殺しぬ。手脚
三人の女ども逃んとせしども。刁婆脚麻れ走り動くを能ず倒れ
死。武松這女ども共に斬殺し。暗に後堂の肉を走りへて響亭樓の梯子
を登り。潔こと水の如く且耳を側めて動静を伺ひ。暫て彼張監張青結
蔣門神各淫酒して立るを。蔣門神云ハ。相公這遭ハ酒に武松を殺
して仇を報じ。ひふとこ忍ぶ莫大なり。他日必ずこれを殺し。
ふ張監張青云。我り家外張教練の教を受ひ。ひんぴんとして肯
て這等のことをなんや。汝多くの金銀を費して云へ。這次の計極めて神妙
なれば又不可なる所ハ実めて今時分ハ彼四人の者已に死して武松を殺
雲浦の辺にて殺しなん多くハ渠ハ明日ハ必ず共に清風山を指して逃ひ
去べし。張教練云。彼ハ人の者ハ計を知て抱ひ
今青の肉を喰るとも。蔣門神又云。系彼女人の身子に再三命じ
殺して速に回れとも。含ませる間彼ハ必ず多くの金銀を下し。殺ひ
を若ることあるべし。何ぞ越して明日ハ。武松已ハ三人を云と聞て大ひに怒
今彼悪しんやと思ひ居る。今夜武松何等の働をなすや。次の者を見て
知るべし

新編水滸傳卷之二十七畢